

芳新集

三編

0-81 (濟)

俳諧資料カ一卜

年代 (嘉永4)

編者 (筆者) 有昂

書名 芳新集

備考

嘉永4本

高田陸園付

(下垣内蔵)

山城



吳市河原北五丁目三十二番八号  
下垣内和人  
電話〇八三三十七一九八五四番  
〒737

一 変化は是れはききしを記す

梅室

梅のふもれはききしを記す

太斗彦

在りし廟を記す

梨亭

喚ぶる夕影も成るは是の中

梅窓

秋のゆきも名の中を記す

黙郎

あは蓮乃うらを返さるる

夏治

招のゆきも押さるる

夏雲

木のこゝろは寝乃、音やうそのぬ

意喜

帆よりうら風の後や喜の海

草物

そくくれく考も藤付の月とあ

始風

山麓の昔やうちう守小喜年

魚交

生ぬきき砂ふもそや海涼し

化蜀

曳と松動ぬ小松ようらへきり

未文

投てきり子苗うらや牛の角

文翠

布くくろや梅雲の套をそんて雨

杜葉

初原や麓をくそき江の光り

未明

影より向ふ勢ひききりて下り徳

篤嗣

すくぬのくろくろくく藤光が

即凡

手枕や百合小面くそ子の鹿

冬見

あきくろやおきと隣しとくく蒼

巴江

羅柳を傳ふ月くそや秋の雨

梅通

くろくろを詠くきくろくちをれ

務禰

障うちよ月夜きくく五月雨

仙菜

黄名の露を出る夕暮の露 雨翠

情をよほく君より庭の牡丹在空 素風

春の暮るる日初きたまるかまのこゝろ 祭魚

大空のうたをうめたる 暮の乳 松雨

夕のうらみと暮ハ夕乃ちの紀志願が 如井

つ川に居る守若葉やうきの枯 寒く

仰あきねや河端の弓乃魚 月坡

ひらり揺る月の初きと秋性か 九起

梅のうやこの時にも戸なり 岳風

何を甜く舌の舌みや苔の舌 梅葉

おのむのうくや君をすくねの鳥 南鴨

そけを病むねくちと空を志仙 里玉

境内を帯びて君とくや若葉 五言

鶯をさかする乃外やまをうり鳥 芦洲

獲るをせまぬ鳥あり餅むる 潮月

算尺くみよるや梅の枝 委水

黄鳥の急来を詠す 危 岱年

まゝと暮のほろ暖やまのうらま 鳥白

登り書く入や干涸く清く水 高樵

浮山木を紫すそ刈らば果古鳥 花趣

二寄らまそ風の清き干川 風田

あゝ波の透るる見らば高の心 里水

まゝと峰をこぬぬ船りや柳ひら 露光

初秋や仕暮せ坐する如き猿 魚光

二筋うらねるおや落つる鏡 毬光

志布と美樹の一木や初秋り 秀丸

晴やまを成程の相並るる 老波

澄切く月うらまや取去 台月

夕音を隔るる青田の除小 守山

山より深江よそふ高の山家 旌雅

うらまもゆる初年や大矢敷 淡節

よまの雨の晴るる出後 也然

漸の音も志つめそむのさうりや

湖風

却ちなほや月のとくぬきの丈

麓谷

雨のあき月よ出くすや鋒の証

月華

色月をくむれ障りり枕烟

札梁

此仙の飯くくむのしえり乳

重素

立志をなほくく暮るる果去香

芥余

お打ち我りしきさるりきさるりか

杜嚮

有

有

英名も身てくむ梅の本のまぶ

笑乃言も成るふ喜日 意真

清漁船鴉し通り旅人路く 羨香

株をく孫よゆめ新梳の葉 貞

まの月のしまた出きくれ山のわ 真

聖名くつまをくかきるきり 香

借拍丈刈と抄らせるひん子指

ののく抄たる孫乃かつかく

着あふまを居ると吾妻くつりぬ

わゆる成をる守井の才庭

つひと袖引くたされふく望

業種の喫り諸生知らる

名月いつも季子片あつて

状乃返るに尊係く来る

音

真

音

音

真

音

音

真

ある筈の佐利の物海音もけり

親も色せぬ川留乃雨

被見戸乃折る時乃一集ゆり

かよふと袖よりぬる業の鳥

顔杖より少くまきぬるの水

思つくるすくもやうり白音

まよひしよもよきそのお守奈良法師

ふたをた飾物なる是の音物

音

音

真

音

音

真

音

音

りそくしよきよ麻生しよ 物しよ  
燈しよのまらるる明家あやき  
かいたしよ外く提るま相く裾ぬき  
苦 勞をまねに信ふけりあひ  
旅 一度志たれまよする食ふのこ  
蔵 引流の月のあそひ場  
物 しく下福あふまき寸 樂 云  
月めきなるしよ 物めけしよ 也  
音 真 音 真 音 真 音 真

お 撲しよと櫓をあつしよ 負兄臺  
物 ち 踏しよき 土の志ありん  
方 角をゆれしよ 医者の留ま揚ふ  
伏 せおく籠しよ ありる籠子の尻  
境 内も加茂よ芳らぬききり  
毎 乃あやのくろむしよの音  
音 真 音 真 音 真 音 真

大和

尺出—る悔りちひそ—藤の薔 蒼仙

黄くもや声の清れ—枝福り 素伯

尺まそそそお四續や月涼—

ちろそそわきとかな—や西り忌 芳吾

夕寒のあり—うけ—き夕のれ 南嶽

初つろり—月粧—朱如—芳のそ 里口

急おのろちろも鳴や喜のそ 龜淵

重箱—梅—疾るや色すれ 芳屋

他々おの友方り吾ハ集を友 九瑛

在利の—そ—芳—つき大串が 竹晴

皇統樓記

素伯

山をそそれはあ—所れは仙如—則名ありお—海きに

あ—所れは就ゆきハ—壺ありとや爰亦—心の極を

行ひ南にむし其極—うそ—お梅あり名つそ

皇統樓とほふあそ水楼—こ—中よそ—彼統あれハ

盡まるといふ先哲のことなふたつとていふはあはれ  
まゝて其地の名をもつて呼ばるるの如く南を  
對する山を侯峰といふ又の名を就岳といふ所を  
其つ就岳と脚より変を求め就をとり岳をけふま  
屋と辨ぬる彼の東坡を望棚橋といふに習ふ  
なる一柳の橋は西南より南をひきき子母の  
田面眼よりそのかの安部島山を侯峰の山脈を  
跨ぐ上まちの四隅を度して馬く流石にもの

ありぬちあり操摺川乾にまゝ下居の里の岸に  
ほひ農家の橋の林はなれ殺小隠くみと也  
ふく一喜八畑打の入りと尻突合すとも詠めぬ田  
植のきくまゝく清き敷吹去りて月を苗と  
くろき草花くく車流の粒を金に似たり月ハ橋  
お乃水と新をひたりと其の具は清女と扇とを  
瞬もあつても西の指を福せ玉指筈二上山や  
葛城をまゝく候く畝火を久山を近く控をたそあ

あふに唯ふひのそ乃外を披はら廣く守授はら  
餘り調て友のまうけもれそ盗人の愁ひいあ  
恒振る前舞の隔をならんをいまの心も都をゆ  
ゆら楼外の物めらる楼中のもいそを披や  
尋りたり春を去るは楼の其主人を誰う暇余の  
孫守中島素伯とて記すといふ

山の名乃さるおとらうまうれ

河内和泉

尾さしてそ存るまはそをそ我ま

古流

峰より居る鳴るもわりのたすか

稲海

山畑や野菜もまやそまのそ

和泉

松好

恒外へ候あまわりを尾のおく

松玉

横は

葉通ひり鳴る疲るり向の中

其山

涼しさや日に入まきりそ若の色

素屋

新風よ花のまゝにちるわづらふれ 鳥九

津柳ハ葉をたや住まの肉 縁見

一階の雨よまゝにちる春の川 松遊

静ちれ物もまゝと并ひいり 又辞

雨乃ちるまゝにちるひりか 乙辞

いぢりまゝにちるまゝにちる 梅月

糸の粒ハ何のまゝにちる 乙庭

西君も旅のまゝにちる 太乙

黄鳥やまゝにちる人まゝにちる 虫年

うららかな海をたのむ 爽 海 燕之里

清くまゝにちるまゝにちる 朝喜

ちるまゝにちるまゝにちる 伊賀 喜広

らまゝにちるまゝにちる 二交

伊勢

障子をたのむまゝにちる 只喜

いぢりまゝにちるまゝにちる 松青

暑日やゆき 霞あそ 直乃 署 在竹  
梅りく 果を 依ま 也 少ま づ 成 六川  
ゆきく ぬく ちく ちく 青く 一 高の 子 秋  
梢の ち 萩 あく ち ち ち ち ち ち 菜  
障 才 又 伸 を 切 る 一 杖 乃 雨 叢 青  
うく 海 人 の ち ち ち ち ち ち ち ち 松 柏  
尺 庭 ぬ ち ち ち ち ち ち ち ち ち 閑 松  
ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち 梅 西

出き ち ち ち ち ち ち ち ち ち 楠 亭  
秋 欠 の ち ち ち ち ち ち ち ち ち 老 古  
日 華 や ち ち ち ち ち ち ち ち ち 榮 福  
人 通 り 尺 ち ち ち ち ち ち ち ち ち 雨 衣  
付 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち 只 白  
外 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち 庭 圃  
月 あ ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち 梅 守  
梅 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち 時 飛

喚くやうくなまよおくまきりし所く  
臉 西

船 寄よる氣を喜ぶやうきこの意  
蔭 春

一 園をけり抱きくそ為  
翠 年

鳴くそせし聲入りぬ羽 接 鳥  
蕙 西

舟をりてよりる方 近し 露む里  
徐 水

ひくく色一際見せしきりり  
翠 輪

人 救ふたぬわらむや 寄の中  
喜 川

此 障の偏まきく 鳴る守 登 拙の 暮  
里 石

ありけりけりしと 藤のつとまきり  
其 寄

是 体 様く 貝 売入る けりり  
山 沼

よ 小 風の 氣を 候きく 暮るる 守  
木 下

川 舟の とき へ きたる けり 梅の けり  
玉 志

旅より 立ち けり 暮るる けり 初 梅  
里 笑

うき 若き 春の けり けり 喜の 水  
示 豊

喜 寄を けり けり けり 暮るる けり  
又 於

有節

波越さぬまきの垣根や月と梅

声めあまのうらみ 鳩の 鳥 鶉 春 整

栄刈の初出をいそぐ 芳 満 春 整

大入りあまの松葉をまき 春 整

蘭のまつと唐麦もわめく 登 下 春 整

竹葉のたふさふ 陽の 梅の水 春 整

草のうきと園をんてとる 泊り 引 春 整

まろりて 風より 吹 守 春 整

よき中も折のそふ 身 出 春 整

志のひもまぬ 床 春 整

紙のまきもも 春 整

樹 春 整

祭 春 整

世 春 整

家おんのみまひつる鬼門并戸

洞葉成いそくするの足かく

歩万々おろしあしにききぬ

片くろひ利ぬ離の古柳

新色を濁りて中をのちせけ

お製利をそそくする鳥

り蘇ハ誰と知らぬあまれそ

手寄役り終乃言と終

お方も大権も考る土用照

をくぬ寄進了枯る交

ふ思謙夫名ある松まて例

連立妹を素と刀くらぬ

脱控一志羽まきしんしり

まごかきつ守苞の大蟹

えんうう風呂の盤打月のち

まつを暑さそあとのろきと

ハ 桑もささく後、病はあまされて 愁

母衣もささくおそ劇途入るの 首

振るる炬の火層の消もせし 愁

おつや 袖より新くうく 首

日の電も物も集るともささく 愁

まゝい木もささく 去来の櫻 首

*Faint bleed-through text from the reverse side of the page.*

家あまるとるぬゆきあのみあまが 初葉

考極とささくささくして里の梅 春愁

けつ 燕子ささくささくささくはる 花因

暮るや海をゆきとゆきと 雨柳

夕暮のささくささくささく 柳、さ 素留

お仙や梅もささくささく 春心

同宿十金堂のふら乃柳葉ささく

春枯や池乃底照る夕もささく 難葉

凡心も成りてり結入るる道は 石水

ありきの志つてふ九月そそ敷ぬ草 錦崖

りり水く照きそひりりるる花 子煙

りりりりりりりりりりりりりり 穠扇

故き大よるるるるや百の誰 畚麦

志そそや移の初りり月深し 麦子

西よきそそそ味あり及ふ之 烏甫

彼夜なも移初るるるるわ多持 有野

かきくく遠くくりのうりりりり 梅笠

策支交に暮るるるるるるるん 松居

夜 子あは踏守りりりりり 笠

相苗乃世話うひひりり月のみら 庄

わらわらわらわらわらわらわらわ 笠

求めわらわらわらわらわらわらわ 庄

いりりりりりりりりりりりりり 笠

いりりりりりりりりりりりりり 庄

いりりりりりりりりりりりりり 笠

いりりりりりりりりりりりりり 庄

初撮の思ひと初りの島めくま  
居

おろのそあきと恋まぐ習  
笠

物言も惜しきお襟しとれ  
居

瓜薯まきとやかきと天  
笠

村端下橋福の湯場の礼まき  
居

津出し乃云もゆきはと  
笠

月夜と葉箱印とを挿し付  
有節

まのまの山まのりりかま  
居

烟焼のたきと火印と火燃のり  
笠

漁まきかきと黍まき乃笠  
笠

あまの人の愛おふ挿や門乃書  
梅笠

取正まきとまきまき  
山友

初めりやまきまきのまき火吹竹  
松居

夕鏡山とく障子鳴り守やまの鏡  
書尚

兼我捨てまや浮訓ぬ鳴の籠  
藤魚

まのくく丈夫華も形一つ柳 寒翠  
静めくやそり引之物と路 未化  
ひより位身ふあつそれや静く畑 蕉西  
月代りて夜も志すむや山の梅 橙居  
うれいさな静を和梅が菜より 志摩 不遷

尾張

星の逢ふ折やよひらるる月も入 黄山  
喚ひせして八音を和雨やうきらるる 西后

意くくちかきくて恒おのすこれが 鳥津  
祝てき考まのめ乃木未る 梅裡  
向ひけ息のまそゆ一それお 一清  
田乃縁も歩けとそや神世月 鴨屋  
つるくの池ふよる鳥や九もの際 碎西  
眼も見えそ風も露も和鳴の湖 市寄  
折も知く月もあつときほそあか 鳥物  
菜の和も所あつとそそ 東山 李暖

袴の急流よひくまがよひ  
思文

お仙や子守の月あかり  
文之

こや咲いゝるふちやきく  
求可

西うらゝし神音すりり  
喜松

梅まやゆ夜のうちれ刀掛  
肩峰

震ふりよきふゆつり  
掃谷

日乃さるるや牡丹よ  
玄至

書又入やりを  
兔尺

あゝのゝきく之整や  
西耕

お花よ何乃は来や  
花尖

さるる田もくれぬ  
五峰

田もくろき  
何来

梅さくや挿とあ  
龜年

水障やた  
新水

さくく苗や水  
其節

案内の釘を借  
香院

つるつるつる木立の見える所ありて  
有橋

三河遠江

魚先より新名に於雁乃名洲に  
梅谷

名月や、安自懐れ玉木賣  
是武

家のみく又焚流る故を  
指鹿

夕息や登ると知りの一土あり  
令雅

堀なく常清本流れる所を  
徳亀

る响数声あゝんるまきり言成  
黙翁

水の音乃おろる所を子や水の音  
為谷遠江

木啄多や夕りくせまる浦に於  
津鹿

送火の燈をまきりや船を  
雲汀

雨のうちたもろく松のゑをれ亀  
應居

赤七日折る菊をそへて雨を  
願西

霧もろく風も誘ふぬ 芭蕉  
居由

彼風もまぬ杖志や茶  
青牛

朽くもろく折るわらわらと山  
杜水

武蔵

英島やとく来て居るをすゆ野 為山  
 ありとらふ市を極く一葉の苗 葉土  
 明星の影もその影の透 百文  
 似し、それ角をさあひり 若万部 西馬  
 居るうらうら高括り居て 夕月在系 夫重  
 月不もを時自の足ぬ 田毎部 葉後  
 高いありし、そのうらうら 粒の氣 彦洞

喜や世の人あともあまの栞の巻 由誓  
 神のゝめ粒の庭をのわくくぶ 具外  
 物居る神居の跡りや神と粒 祖々  
 城ふやんまも訓く道一橋 潮巻  
 童のゝるまや風まゝうら表 才物  
 鳥城まれ声まや夏は臨り 南々  
 うらまをを思へは長くむ吉 寄三  
 片のくとりをそまをぬ粒の得 得葉

立くは波もあやをきくも一 尋真

羽をくく一山くくや春の了 天由

茶也も獨りけあや水新堂 一具

近江

音をくく風をくくく此の梅 世岐

又十三年の病きさあから功も能も  
あふなきもあきさあうくも橋をあれく

託くく又この初日相くくり 葛西

事く候くお心にあやも親慈 蓬村

去来くくの物くくも柳の梅柳 津洲

蓬 葉や親乃をくくく変るも重 呂水

伊風の吹くも松やもくくのみ 一

くやくくくく黄をくくもくく帰引り 藤六

百子も飛くも谷乃雪解くも 枝重

五月雨もくくもくく不踏若 月峯

雪乃あるも山風あるも初露 箕玉

あはれ声年もくくも道はくくも守 為助権

松の栞よせぬくひくぬき  
松月

夫のよき癖の栞の多し  
不届

鳥一羽眼先より滑く  
其州

字修むすや一物づくに  
花見

黄鳥如柑を入るる  
巴洞

山鳥若尾よりゆく  
利宜

色くくくくくくくく  
四峰

華引くはるの露や小松魚  
子露

愛する鳥を砕く  
不投成

川鳥を築く  
睡涯

草ひくくくくくく  
花架

砂交り枝より栞を  
淡屋

陽炎や草あり文の地  
松月

水面より鳥を待た  
栞樹

はつとくくくくく  
静和

たつとくくくくく  
楓下

響りあふるわらもの陰や余吾の物 末友  
 紫陽花やうあうる石下雪の邊 杞柳  
 旅を喧し楸のおとや水後川 紫石  
 友飛をまき入啼やむくをうる 流斑  
 蒼雪もたのむ小禰のうきさか 四許  
 日々より友あうり新もろり籠 里節  
 昔存乃子輝きき音や子のあ 玉童  
 恒越の湖を新しき盤の月 吞龍

陽炎や秋先むらさき 桐 蕙庭  
 入らぬ水波下まき入り雪の入 美濃 山士

信濃

新杖より旅の志をまきや春の菊 玉帯  
 朝起を訓てはるまのや初まき 青坡  
 夜ねをまきあふるまきよきまき 李明  
 伴う旅をまきよきまきよき 我隣  
 つ風呂の露は葉肉や夏のう 白羽

木啄者の先へまわりを舞の冲 逸雄

一日見く月より思ふ事ほくくふ 梧芳

月落く似く家多し一里の音 省意

四五折の由村をうつ目そみもの物 唯舟

喜向やのちりや親く喜打是 和乐

一本はともり好やとたり音 青依

くをわすにもち一火伝くを難 夕陽

池水の底ましくいゆも喜ぶ 龜友

何よりそ柳極たきし一ちが 巖高

けきの柳よりあつれをちうれ 智東

名月よ山つらくくの姿い音 世外

出ぬく事元の色く木下音 菴水

黄昏や鳴くかよふ谷の音 池極

おろくくすも音あり粒の音 松翠

雨二日書よかそりし音響る 柳石

聲のせく志するのこ音の懐 高義

花の袖あ〜に据ゑ出忌情 三劫里  
吹葉の舟も流るゝ寄るや由 獨醒

陸奥出羽

霞のちちりそほりきりま 一止  
梅乃月ゆく交足そも枝はわし 布山  
もつ枝やうたうふりとの月明を 舍用  
お〜新よ松を志〜そ〜うら 芳山  
木〜〜や石屋のつのがら 祇年

膏雪の空きにも似け梅のそ 沈年  
祿の身〜時め〜しるをそ存 桐 東阜  
栢ま〜〜透ちまきそや岨の梅 佳凡

若狭越前

矣天のききもありらわ〜の〜 嶺角  
そ〜の〜ら〜たをた〜そ物 柏石  
養之や何変〜〜〜まの寄 越前 布珀  
二り水も去に倦り五月前 如碎

まほしき知もく世之や水馬橋 仁哉  
海丈ハまほしき月夜の空あり 如積

加賀

卯のきや咲ぬ先々々枝の友 丹嶽  
お年のしほりき体も廟り春 小園  
かゝ駕や西より初行くまらさ 豊收  
網の目成をねく花は曇るま 木立  
黄鳥のひまもくくせる遠きま 里舩

片山を雪もゆきつらさる 松坡  
おもしろや秋昼あふきあけり 釣玄  
短夜や隣子一重紙障の隔 文章  
まの體やつ乃は日さのくさる者 超翠  
山嶺く海のわたりき里州の花 林坡  
穂妻やうき語道き年明り 可内  
迎きえ居る海人くまら初め 晴江  
居るくハ冬のもくれ雪見の春 嘉郎

暮らるる空や悔きののぼる  
襟菜切

うしの巻揚余をさくくくく夜る危  
悠子

防返れ鳥の落毛やつ  
旭空

吹ぬりそぬあつらぬく柳々  
星月

出たししき一日あまらり柳を  
我柳

鳥東風よ後投出くく市の帳  
鳥石

四の書も雲をくくく居る柳が  
立芳

柳の山越くく戸口をとりま  
柳壺

切此中やあまらも親のわいら  
若妻

又月雨の色をくくくはは  
太甫

くくひまの篠をくくくめ  
小文

葉才やさきさくちる松の庭  
元統

恒乃松をけみ掛ひき  
葛露

雪むや人めくくく二之  
季節

手おろし哉尺まるる葉の茂る  
大養

能登

戸ノ端ニ風ニ下リて鳴る鴨の音 竹塙

雨福大ニ下リて思ふ福喜州 淇洲

あきくちやわらわ樹一ツ葉の陰 総枝

鳴り込る波くつり空を亂れ舞 奇鼎

人救る葉葉折しく月尺が 玄和

松くちく心ゆきくお喜れ 習之

嬉しくまた竹の打く音ぬ切義心 貴存

山吹や果を鶉をふ下依き 風兮

朴の葉乃くく吹風や梅雨上り 梅明

庭の木も先尼後しく初冬洗 花溪

陰是くぬ雨おもくつきお月分 葛山

箒持く人歩く木下やと 文洞

庭ちくく柳く語きて春のつゆ 然堂

旅くちくそ洗ひく涼しく天の川 佳曉

黄鳥能くくあくや空の山 李旭

麦粒や葉よりまわれ納屋の庭 晚菰

数つあつた犬の子そなたつ藤葉が  
高橋

生急ハ吹満ちてちきおちるこれ  
諸悠

真まらちる木の葉や雨の流  
梅村

音切く板鳴りもつや枇杷の音  
嬉迦

無極くうら風うらなへる  
茶丘

ゆき起るちりりともて松尾を  
雪鷗

雨ふるとも云は満ちる江の時音  
の文

うら聲も返さく時音すお水  
音来

掃まらく木のをよ埋む帚が  
知声

夕志や雪の中よりちる木のを  
朱竹

去るくや低い声もつら  
素吟

焚布とち成亥隣のおちけれ  
沙旌

越中

除雪を清めくくらの爆牛が  
お茶

うらくもまや霧を城下の外廊  
茶屋

穂子雪まきく寒のうらくねの音  
如静

森心より春待冬のとありが  
 招くその乃繁や山寂きわこ  
 川先の左方よりわらふ田植が  
 寂し入をふさぎさるる橋衣が  
 ありうきハ咲かきささるる柳の家  
 春風の松よ鳴くむらきれ  
 清く静のまらふのうやわと守  
 雲よりあふ人めつとや三ヶ々  
 新甫  
 文哉  
 梓橋  
 翠兄  
 梅下  
 梅丈  
 のお

山のうらり物笑のあつあつこぶ  
 感物むや雨よ去きさるる雲のり  
 口取の手経ゆひり帳くる  
 之し初をあつとく凡浩ぬ五月を  
 いそぎふふ算くし重し春柚が  
 々短を寂よ静たしと静のそ  
 たつうきおのまき歩しその川  
 見歩りも我を居るくうの月  
 松水  
 竹甫  
 近勇  
 看我  
 井高  
 羅雪  
 敬高  
 野乙

初體やまゝに待てるの多き式ね 易年

身の物々様変化も及て交衣 暮年

子孫わが家の遠きやゆまの成 未行

まろおやと名も万や雨一粒 ト少

却可や人をも別々形 壺 劫盤

つらゝの端山も及く大指引 子遙

あゝゝゝの内成壺やい霧のむ 逸江

聖ふらりゝゝや表裏の梅の糸 其懐

黄鳥や月影きえぬ生息 仙友

田の糸を情ゆきをわらふ多 寺裡

雪をゝゝゝと粒よ入ぬ 雪 仙 梅人

一産 叢 壺もまゝありてあり 不及

雲 又入や、あまのゝねを二日足 概下

紺 を穿る風情も及せぬ 出 兮

越後佐後

月のあそびをわき行しきりれ 乙良  
 梅之や入りの下乃ゆらば 春宮  
 水や人のあはれよかきり 崇山  
 ふと月のおもひ出さけきり 好新  
 空い種もつるもつる 柳 里作  
 何鳥の籠もつるもつる 又 又  
 廻 廻り新う守江や子規 樗村

海上の所りを返すりあり 佐後 牧之  
 船の籠子おのつ籠り走りり 桑仙  
 黄鳥や隣子めも一 田原 芥山  
 人のあはれ縁の生あはれ梅の家 樹三  
 芍丹但馬

風のあはれあはれつら松や萩の舟 九葉  
 手あはれあはれあはれあはれあはれ 大年  
 朝涼し物も思ふもあはれあはれ 菅第

日暮れハ山家めくく揚乃忘  
 竹坡  
 大池く接くくくりきりきりきり  
 釜水  
 木立よりくくくく声あるをとりけ  
 崖外  
 起きけくりけく守や物お燈  
 南涯  
 辨山や水際くくく一茂り  
 野卵  
 庭のあま遠せそちくくその月  
 豆翠  
 現代木はまきまきりやまきり  
 の奥  
 藤箱の角く溜り水の泡  
 夢屋

小溜りは毎ハつるりりり子但る 無若  
 山葉ふや小枝折るる空のあく 右権  
 周情

つく如子あま接木のひと帯 南嶺  
 正月や西くくくく内くく識る 内風  
 一以乃風を待りりりり甲 肴雅  
 日杓くくくくくくくくくくくく 一肴  
 春の夜や二度の逆のりりり 純権

虫おくる木の芽と信じて懐巻 紫陽  
 入代り鳴る声や 表の中 天窓  
 あつゝ〜 萱の所くや 元原表 木尻  
 短歌やむららの汐の引のり 斗水  
 たのまわく 船ききりり 海と臺 野原  
 炬乃傍も日すけあけて 橋木の 社燕  
 極々 空く 親子橋木の 工立 谿臺  
 お人乃 午時を ときる 山 畑 仏見更 の中

伯耆

突々く 物々いゆく 権燕多 蕙石  
 初東風や 野々 烏を 引く 薩城  
 人の降生と 嘆くや まつあらし 栄的  
 麻 踏る 小家く や 月と 柳 汲籠  
 撞切く 百の あり 鐘の なる とき 登山  
 東の 是を ときり なる なる の 落む 登嶽  
 空く 制る 空待り なる の 小鴨 杜陵

出雲

如 茂 了 新 々 々 々 々 月 々 東 山 百 年  
 乙 冬 の 一 々 々 々 々 夜 々 市 々 哉 五 風  
 船 既 也 船 日 ぬ 守 亦 也 也 乳 浮 々  
 人 才 也 出 ぬ 々 々 々 々 々 廟 々 々 雙 鯉  
 田 々 々 々 羽 音 々 々 々 々 々 渡 り 々 弄 鳳  
 名 月 也 清 々 々 々 々 々 々 守 守 守 守 守 濟 在  
 喚 々 々 々 一 粒 持 々 守 桔 梗 也 靜 葉

葉 々 々 々 秋 雨 々 々 々 々 杜 翁 塘 夢  
 桂 乃 亦 也 照 日 霞 々 々 々 昔 清 水 素 新  
 雪 々 々 秋 々 々 々 々 々 々 々 竹 々 々 画 成  
 福 々 々 々 向 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 舒 泰  
 思 々 々 々 外 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 捨 行  
 犬 々 々 出 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 奈 人  
 梅 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 常 丸  
 一 声 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 馬 得



海山の解をよせし梅のふ 雲葉  
 霜おくやふのしりしの菜のまき 錦苔  
 きしり一葉おつとめや解心 松毬  
 りききくや曇り懼く風のつれ 柳外  
 行くとく一気満しぬ物とる 踏踏  
 雪の積乃松杉たき大津が 杏雨  
 雪の下吹や庭落井のふき 雨  
 片よりそ尺と通り陀とる 荷葉

嵐の多くおや声とるに惜る 松鳩  
 雪よりあて換おきき扇が 東嶽

女 薈

油断しきけおきとるんや 甘古  
 雪信を掃きハ色のぬ葉も 程嘉  
 祠者とひとるきおき解梅が 本居  
 次やの家旭くり出寸喜田家 古徑  
 雪の雪し月の消り物即 家曉

笠之脱もりのそとある如き也 西夏

わもそれてき視ひ盡すや手鞠吸 一貫

飛鳥の羽多ふりや朽ちるる

谷底く麓迄声や届くき辰

二少く許をさすや果する

紀伊

紫陽花や空を穿ても物心 嵯峨

風抄の炭次も君も之物哉 南渡

一羽花のうすや兼くさき 岑直

二日詠も君ぬ海をこや玉出る 一の掬

山形の多き給はれ布ゆす守 森寛

梅の香や明け月の一葉も 翁舟

淡路

なほとまきそ花おと為よくの鳥 貞乐

山吹やさるひらわと撓るや 市藤

志つるやさるよりほの物もり 蔭清

恒一筆ありて甲子年くひあるれ 墨石

我んわきまわくらん後ゆく 踏池

床もせぬて扱を押してむの宿 茶城

栂もつて初午休よまや恒ゆる 守溪

雪山の初めちちり春の雪 竹坡

けあさすて追言やあまの持 梅庵

里されもはるもて休しつゝの春 柏堂

董聖や外の雪よハ服も付れ 楓所

手了徳のあまハ是る候なき 樵西

阿波

一月を是よあまははるをく 茶像

静さよるはるの者のゆり、ま 茶齋

眼もそくはるきそや初る守 控京

たまくの雪もく嬉し喜の膏 夷岳

十月やよきそ持し考乃赤 亨均

梅擗く実立舟の龍先が 樗風

白溪や何き月あふとよ如猿 順美

吹つあゝ風のゆるや除小雪 手葦

清月よ声をうりきくまを乳 桂雨

松の青葉をむ谷のひきまゝ 梅道

正月のひと寝めたる山あられ 蒼郎

春よりや在かくふる池のきこ 筆海

冬枯やつらく歩り 禱鳥 木鳥

山風の風や柳の 節と 末 羽長

秋よ入る水の音きくそ見多 思風

引渡そ石せし柳は減か少雪ふ 史白

去つる春の物を残しそ雛乃まゝ 一丈

二月越人の胎よつて柳梅は 在 一

後岐伊豫

折こもゝ風の音きく桂投ぶ 井 魏

雪く出ろ又しくめくり春の氷 海 藤

月代や峯引ききりふ如陶

山葉おや存少事考のく知可而

何梅

萩源

そくくうりし里の夕庭や枇杷系

才意

稻つまやうもて秋舟のつく交

其琴

夕燒ま晴らつゆとや情うつら

五羊

七子の秋しそりく控聖を

分外

あふのうもて足よ出やほのそ

梅意

牛乃あく方うり可も反楚ぶ

毛端

梅くやちつや相先の意ゆり

梅好

意初く小声まきたふを鞠れ

竹屏

音のしそ秋のりしを 落橋

我ト

ゆきいふを葉のうららひや枝柱

黙翁

喜の秋やほる可伯を振くろ

若後

白雲

隆壺や韻多声の送おと

嵐里

一々うのひそ新く落のそ

籟水

向壺新抄の考や存のを

子里

夕空の一隅をくぐり飛ぶ

柔乃打や滑きうとすれ六人の事 兔白

式日や音りけり料理屋 札高

口上乃みしけり茶の伎う春 立石

常持ぬ手物来りれ世後のわらうき人にて物を扱すと  
しよもそ六張あはれは金紙を以て扱きて價とをすりぬ

日毎望ま揃めくそせけ金紙是 日向 昇く

折口のたしききしぬゆららる 皮糸

おこやふたりく咲初くしを

入おきくし後ふきくや落しあ

まひき松もあつやうくりむ

おのむや新きんえねと春の声 夏峰

春の舞あはれ大と尺寸草 九文 芳吉

暮るまてハハもよらけ初あらせ 初一

立時乃名そりにわきて是の司 野鳥

おのふやうく寺の流りき 只一

人の気はうらやうあまのそ 也喜

五恒や栂のむく末を内と外 阿山

つりぬらるる扇片まよふ一いつ哉 明考

登過くく是尺付たり冬之栂 北 為 蹟

宋恒のくちも山海やまを 天 三 栂

やとるあふ雨を減さる昔くく 天 幸 木

返し事ぐ元の砂少中まを 天 岱 峨

お 歴

せぬ恋もかりひま寂り後ろ 抱 儀

中うらそ情を力や 栂 初 頑 水

聖體を解変り木のを此 初 彼 回

表前より壁を塞きて 藪の夜 吾 佛

一々乃りれひくとき守木 初 栂 五

花 初 栂 五

花 初 栂 五

涼しきや波のまらるる 初 栂 乙

も〜む百のさ〜く晴り月のみ 新成

待るすのひつ溜りも〜り守 聖在

山深く村を平地乃懐の春 一 峯

とを〜風〜りのせ〜走急極の鐘 危裡 虫洞

只の程も〜よひめ〜や真善原 孤南

帯に〜を〜ゆ〜て〜と〜り〜た〜の秋 文中

志〜と〜わ〜と〜岩〜お〜た〜め〜く〜山乃露 有節

鳥谷

鐘の声わの字を〜成り

晴りや〜と〜業〜よ〜く〜る〜有 澄露

炭宿 春を〜時〜文〜ふ〜き〜や〜り〜 谷

〜と〜名〜を〜呼〜く〜人〜を〜め〜し〜 露

在ぬふ土俵の砂をかきお〜守 谷

〜寄〜お〜く〜万〜風〜の〜志〜ら〜す〜れ〜 露

著〜と〜成〜す〜ら〜わ〜き〜く〜お〜ら〜す〜て〜 谷

綴りも同くも福也と云ふ

谷

世もわがまき人より操もたゞしき

谷

志らも又おくる如山の雲

谷

いふの如く鞠や鑽のきこふ付く

谷

歩らりあらうらに提灯も消す

谷

くせ袖も急なまき入此罷りり

谷

蒼もわりの如くはあくの杖

谷

くられくる豆の粒引く縁うら

谷

急の本よりよたくる草塚

谷

月をやく梅も糸くつきたち

谷

紙考のふりまがる尾うらる

谷

あつゑも下憫儀の大や配

谷

初ら袖ゆけそとる男

谷

たのしみ狗とむねとのまぬら

谷

御らもわそれ玉のくり火

谷

迹ももたなりあか鐘の音をさうり

谷

短木まきしつゝ縹の海老き

谷

まき後又むせうりたるぬゝ飯

谷

孝り志のつゝあきき

谷

鶯よりの作とりつゝ月の舟

谷

きしひく武意をあたため

谷

子修ホウ西新ハユク又き

谷

田を凌ぎし葉まきつるけり

谷

河縁けきむらふ人より訓や

谷

この大系乃ゆゑ無 色

谷

造作の果したるれを路をつけ

谷

穀うゝとる牛哉 こゝとる

谷

卒乃それく志つゝそよ入

そよを斜り喜の日の節

谷

柳雨

程火のあまをくくぬもりれ

河縁うき浪ふ及たすの形

鳥谷

後 備 ち や ま ず め ぐ 袴 脱 ま せ ー

酉

の 愛 う ね 子 ぐ 煙 せ ー ー ー

酉

星 と 宵 月 の 啼 き ー ー ー ー ー

酉

山 岐 つ ー ー 萩 乃 ー ー ー ー

酉

鳴 き け ー ー ー ー 綱 を 張 ま ー ー

酉

志 だ し き 叶 亦 足 も ー ー ー ー

酉

ち ー ー ー 近 身 代 ー ー 立 寄 り

酉

塗 去 盡 走 ー ー 求 ー ー ー ー や ー

酉

飛 の 心 ー ー 踏 身 ー ー 尻 先 ち め ー ー 犬

酉

ー ー ー ー 氣 せ ー ー ー ー ぬ ー ー 鐘 響 ー ー

酉

お 身 端 の お も ー ー せ ー ー 方 ー ー 後 々 ー ー

酉

の ー ー ー 出 方 ー ー ー 袖 ー ー ー 守 ー ー

酉

お ね ー ー 掃 目 だ ー ー ー ぎ 盆 の 陰

酉

ー ー ー 新 糸 ち ー ー ー ー ー ー ー ー ー

酉

交 ー ー ー 月 の お ね ー ー ー 方 の 蔭 ぐ 成 り

酉

ー ー ー ー 表 ち 糸 の な ぎ ー ー 山

酉

主、祝のあと昂り髪そりそ

ため息つらそ女子の愛り

手万もろりかたもえろ、難言病

茶代、詠くこゆるてけし

也江詠のあはさきて大元毛

謡とそろくうたふ 東川

いふまゝも醒あそおろし碁

笑悟のうき名おとあきあ あね

丙

丙

丙

丙

丙

丙

丙

そはてまこと碁をろ寸牙をひり

無 双 壺くらゆー、うら月

吾を減り殺し居り相もよふ時候

志ありからんう茶子喜ひく

まぢの通りうりの息を解

お玉うらう及櫛のうら

何るもたらの地、唐を詠る

うり出ー葉よ名かそりこ

丙

丙

丙

丙

丙

丙

丙

丙

秋を憂ふ是しと秋とあめ花 若

孫 生も、まや、うそくりのそ 菊

鳥若

清くくく、高の、原より春の色

葉も引、乳々、あ、う、ま、智 應若

蘆 蒼々、竹、四、五、本、命、に、の、ら、重、そ 若

ゆ、り、よ、帯、く、く、印、の、初、事 若

月 細く、と、葉、の、志、も、い、ま、將、ト 若

い、く、ま、く、た、め、を、や、喚、の、梅 若

心 あり、よ、さ、ま、は、人、も、ち、ま、あ、を、は、 若

も、も、も、この、子、こ、産、声、の、ち、り 若

白、雪、の、端、より、及、乃、秋、の、め、く 若

お、く、ま、先、く、く、松、魚、は、ま、丹 若

社、て、を、満、ま、の、割、毫、の、お、れ、次 若

舞、乃、か、く、く、振、の、う、ん、あ、ん 若

よ、く、も、初、く、く、行、伝、ま、ま、初、ま、お、と、い、ぬ 若

月の出ぬるる遠くを別れ  
 移もせず声もなれぬのなりく寸  
 袖味もなき懐をけきよせ危  
 片くりて不踏ゆくにくらもや  
 内とちくく外のあたりの  
 葉才の足跡うらなるは戸庭り  
 云 喧嘩たせもなれぬをねる  
 裸火乃風よりなまざるはん 懐  
 居 居 居 居 居 居

此 贄をささむらうの心  
 何やけそきく耳に響く傍あり  
 ひくをあるこの片かひいこ  
 撫子も露のちあふよ吹く柳を  
 何く影をささる懐のぬまは  
 精粉もえよりきちと裁やそく  
 かく海の月をささる寸数回  
 よらるるをわ懐仲万よいつたれ  
 居 居 居 居 居 居



